村行

村の行　七言律詩　王禹偁

馬穿山徑菊初黄
馬信悠悠野興長
萬壑有聲含晚籟
數峰無語立斜陽
棠梨葉落胭脂色
蕎麥花開白雪香
何事吟餘忽惆悵
村橋原樹似吾鄕

馬は山の径を穿ちゆき菊は初めて黄ばむ
馬に信せて悠悠と野興長し
万の壑　声有りて　晩の籟を含み
数峰　語無くして　斜陽に立つ
棠梨の葉は落とす胭脂の色
蕎麦の花は開く白雪の香
何事ぞ吟ぜし余に忽ち惆悵するや
村の橋と原の樹と吾が郷に似たり

左遷の官吏として、任地におもむく途中の即興詩と思われる。「野興」とは田野の風物にうながされた感興。「棠梨」は植物の名。「胭脂」はべに。そこまでの叙景は、平凡のようであるが、従来の詩人の発掘しなかったものを、発掘していないでない。「数峰語なくして斜陽に立つ」は、宋詩に普遍な自然の擬人化の、早くも現れたものである。また蕎麦の花への着目も、それまでの詩に現れないではないけれども、新しいものに感ぜられる。さらにさいごの聯に現れる「惆悵」は、ものおもうであるが、ものおもいの内容は、これまでの詩人と、必ずしも同じくない。これまでの詩人ならば、異郷の風景は、吾が故郷に似ないとして、「惆悵」するのが、普通であった。この詩では望郷の念を結果することは同じであっても、異郷の風景が「吾が郷に似る」ことによって、やすらぎの余裕をのこしている。

王禹偁、字は元之、官名によっては王黄州。山東鉅野の粉屋のむすことして宋の建国の六年前に生まれたが、地方官に文才をみとめられたのがきっかけとなり、第二代太宗の初期、三十歳で進士試験に及第し、以後中央の文筆関係の職と、左遷による地方の職とを、交互に歴任しつつ、第三代真宗の咸平四年、一〇〇一になくなった。　その伝記は当時の新官僚の典型と思えるが、その詩は、当時の主流であった「西崑体」と甚だしく異なる。

王禹偁は「子美の集は開く詩の世界」「本と楽天に与いて後進と為す、敢えて子美は是れ前身なるを期せんや」などと、子美すなわち杜甫と、楽天すなわち白居易を、思慕する。

吉川幸次郎著「宋詩概説」第一章　北宋初の過渡期より抜粋